

高齢化を背景に国の財政を圧迫し続ける国民医療費。もはや40兆円の大口は目下だが、その医療費のじつに5分の1を占めるのが「薬」に絡む費用なのだ。しかし、本当にそんなに薬が必要なのだろうか。今回は、そんな「多剤投与」のあり方に一石を投じる話題の1冊を取り上げる。

ジェネリック推奨の前に

『その症状、もしかして薬のせい?』(セブン&アイ出版)の著者、長尾和宏氏(顔写真)は、もしかすると日本一有名な開業医かもしれない。兵庫県尼崎市でクリニックを運営する著者は、「町医者」という肩書に誇りを持って地域医療に従事する内科医。多くの著書や医療サイトに向けたコラム



この本だ。「多剤投与」が起きる理由は「いくつもある。ある症状を抑えたいから」

ベストセラ― 5分でわかる健康法

でも全国的にファンを持つ同氏の最新刊が話題だ。日々の診療の中で、あまりにも多くの種類の薬を飲まされて



長尾和宏著『その症状、もしかして薬のせい?』セブン&アイ出版、1100円+税

込むために出した薬に副作用があるため、それを抑える薬を出す。しかし、その薬にも副作用があれば、さらに別の薬を出さなければならぬ。これを繰り返していけば、いくつでも薬を出せる。他にもある。たとえば高血圧と腰痛という2つの疾患を持つ人が、内科と整形外科を別々に受診しているような場合。内科では降圧剤、整形外科では湿布薬と経口の痛み止めが出され

薬物の過剰投与に警鐘

- ・ふらつく
- ・味がわかりにくい
- ・口が渇く
- ・尿が出にくい
- ・便秘がち
- ・眠れない
- ・ボーッとする
- ・よだれが出る

薬の副作用の可能性がある代表的な症状

たとする。

ところが、どちらの薬も「胃が荒れる」という副作用があれば、内科と整形外科の双方から胃薬も出される。薬の知識を持たない患者が「医師から出された薬は飲まなければ」と考えて、律義に全部の薬を飲み続ければ、少なくとも「胃薬」については過剰投与だ。こうして処方された「無駄な薬」は、おそろくどの家庭にも相当数存在しているはずだ。

無駄なだけならまだいいが、飲み合わせが悪ければ薬害のリスクさえある。健康を求めて薬を飲んで、それで体調を悪くしたのでは本末転倒だ。

この状況を、国も憂慮はしている。特に国民医療費の面での憂慮が大きく、しきりに「ジェネリック医薬品」の利用を推奨している。ジェネリックとは、

特許が切れた薬の後発品。開発費が少なく済むので薬価も安い。

しかし著者は言う。

「先発品とジェネリックが同じ薬ならば、高級すし店と回転すしのどちらで食べても同じ「マグロ」と。

本書で著者が訴えるのは、次の3点に集約できる。現在の日本の医療界では、必要以上に薬が処方されていること。そして、その「多剤投与」によってさまざまな「症状」が新たに生まれていること。さらに、安だけ理由でジェネリックに頼るのではなく、いま出されている薬を減らすことに目を向けるべきだ」という3点だ。

「著者が他の医療機関から引き継いだ患者さんを診察すると、処方されている薬の減薬から始めることがよくあるそうです。結果として薬を減らしたほうが、体調がよくなるからです」とは、編集を担当したセブン&アイ出版の沢田浩氏。

薬をたくさん出してくれる医者がありがたがられたのは昔のこと。無駄のない医療を実践してこそその名医なのだ。(竹中秀二)

安倍晋三首相は年頭記者会見で、戦後70年の首相談話を発表する方針を表明しました。首相としては、談話に「戦後の平和国家としての歩み」や「世界への貢献」を盛り込み、未来志向に軸足を置いたメッセージを発信する考えのようですが、注目すべきは、「村山(富市)首相」談話も含め、歴史認識に関する歴代内閣の立場を全体として引き継いでいく」との発言です。

歴代内閣の歴史認識の継承を促す中韓両国や米国への「配慮」ともとれる発言ですが、先の大戦への贖罪意識から日本政府が発表した「河野洋平官房長官談話」「村山談話」の撤回なくして、歴史認識を巡る日本の名譽は回復できません。

河野・村山談話は「日本が悪かった」という自虐史観を日本人に植え込んだばかりか、国際社会に対し、「日本は謝罪する以上、残虐なことをしたに違いない」との印象を与えました。おかげで、中国の

幸福維新



いよいよ!!

軍事的膨張などに対峙するなか、頼みの綱である米国が「世界の警察」の座から降りようとしているにもかかわらず、日本はことあるごとに軍国主義化を危惧されて、「自分の国は自分で守る」体制構築も満足にできない状態です。日本の誇りを取り戻し、国の守りを強くすることなくして、日本の未来は開けないでしょう。

歴史認識の見直しを「歴史修正主義」と批判する向きもありますが、事実を改竄しようとしているわけでは決してありません。そもそも、「日本悪玉論」は日本弱体化をもくろむ戦勝国側によって広められた歴史観にはかならないのです。

先の大戦を日本の侵略戦争とする見方はあまりに一方的であり、「欧米列強の植民地支配から有色人種を解放し、白人優位の人種差別政策を打ち砕く」とともに、

炎話で日本の新たな姿勢示せ

つが国に正当な自衛権を行使し、

インフルエンザも流行し、風邪の流行が本格化する時期。背中がゾクゾクして「風邪でもひいたかな?」というときに、長尾和宏著『その症状、もしかして薬のせい?』セブン&アイ出版、1100円+税

クラシ

「一般的に、風邪に対する身体の防衛本能としては、体温を上げて免疫を高め、発汗により身体を熱を下げます。葛根湯はその

月々金曜は健康ニュース



ういった身体のメカニズムにアプローチするのは、眠くなる成分が入っておらず、2歳未満のお子さまも服用できるため、

2008年に30